

第5章 調整員報告

1. 活動報告

(1) チーム編成・役割分担

各々上記担当分野の業務を実施したが、特に、診療活動の現場においては、玉井医療調整員が薬局部門を担当。また、今回チームに加え、JICAドミニカ事務所の協力を得て現地参加の形で永野千春・矢田涼子の2名の協力隊員が参団した。永野隊員は箕輪先生診療時の通訳、矢田隊員はトリアージを主として担当した。

(2) 現地医師等との役割分担

患者の選別は、現地の事情に詳しい現地医師と我が方矢田隊員が担当。

現地医師（診療所医師）の診療が可能な地、即ち、カヤコア及びエル・プエルトの2地区においては、現地医師用と当方医師用の2つの診療室を準備して実施した。

相互に連絡を取り合うとともに、現地医師が診療する場合に不足する薬剤等で、現地側での利用が安全、かつ、容易なものを供給することとした。

また、当方医師の診療でフォローの必要な患者については現地医師へ引継いだ。

現地医師の存在しない地、又は、存在していても物理的に診療の困難な地即ち、ラ・カレタ及びクマヤサの2地区の場合にあっても、必ず、後方支援病院（ラ・ロマーナ病院）の医師、又は、現地医師（クマヤサ診療所医師）が常時立ち会う体制を取り、後方支援病院への移送や紹介を可能とした。

その他厚生省地方事務所からも医師及び看護婦をC/Pとして配置してもらい、円滑な連携を心がけた。

(3) 診療活動（日程、診療時間、診療患者数、診療内容）

厚生省地方事務所との事前協議の他、4カ所の各診療地ごとに、現場打ち合わせ（レイアウト、役割分担、時間配分等の確認）、資機材の設営、受け付けの開始、トリアージ、診察、処置（治療）、薬剤供与、後片づけ、資機材の撤収、宿舎帰還というリサイクルを繰り返した。以下に受け付け時間（診療時間はこれより長くなる）と、診療人数を記す。

・カヤコア	: 10月10日	15:00~17:00	
	10月11日	8:30~12:00	
		15:00~17:00	診療人数: 88人
・エル・プエルト	: 10月13日	8:30~12:00	
		14:00~17:00	診療人数: 134人
・ラ・カレタ	: 10月15日	14:00~16:00	
	10月16日	8:30~12:00	
		15:00~17:00	診療人数: 157人

・クマヤサ : 10月17日 14:00～16:00

診療人数: 54人

(4) その他の活動(診療外活動、他のドナー、先方厚生省との協議等)

・診療地周辺の被災状況の視察(鈴木隊員報告等参照)

・ニューヨーク市チームからの情報収集(業務日誌参照)

(5) その他

活動詳細は別添4業務日誌を参照願います。

2. その他所感(厚生省側の対応等)

カウンターパートとなった厚生省サン・ペドロ・デ・マコリス地方事務所、及びラ・ロマーナ地方事務所とも、情報の錯綜等若干の混乱は見られたが、被災直後の状況下にあることを考慮するならば、ずいぶん努力してくれたと思う。また、マコリス地方事務所はラ・ロマーナ県での活動を含むほぼ全日程における機材の保管や看護婦の張り付け等様々な面で世話になったが、大変協力的であった。

また、診療地の看護婦やボランティアに至っては、自ら被災者であったりしたが、そうした状況下であって、よくサポートしてくれたと思う。

以上

平成10年10月9日

ドミニカ共和国ハリケーン災害救済
緊急援助隊
上條 直樹

業務報告（10月9日分）について

標記に関し、下記の通り取り急ぎ報告します。

記

1. 業務内容

- (1) 日本大使館（赤沢大使）表敬の後、JICA事務所にて打ち合わせ。
- (2) 保健省次官表敬訪問、団長より活動への支援を依頼。
- (3) サン・ペドロ・デ・マコリスへ移動。

保健省サン・ペドロ・デ・マコリス事務所にて緊急援助活動の内容について緊急会議。なお、会議に先立ち本事務所にて、メルセデス地域担当次官による地元記者会見があり、緊急援助の概要説明とともに我が方に対する謝意の表明がなされた（掲載記事等については随時送付します）。

2. 今後の活動

(1) 活動拠点及び活動日程

10月10日（土）から11日（日）まで

→被災地カヤコアにて現地診療所を借り診察・治療を実施。

10月12日（月）から13日（火）まで

→被災地エル・プエルト現地診療所を借り診察・治療を実施。

10月14日（水）は団員の休息日とし翌15日（木）から隣県のラ・ロマーナにて緊急医療を行うこととする（C/Pとなるラ・ロマーナ地方事務所とは12日（月）中に打ち合わせ予定。

3. その他留意事項

(1) 活動後の先方医師等による対処へのスムーズな転換への配慮

援助隊チームの撤退後、「ド」側の手による治療等が的確に行われるよう、先方医師に対する我が方活動結果の伝達、看護婦への薬品知識・処置法等の伝達を図ることとし、これらフォローアップのコアとなる人材配置を先方から約束せしめた。

(2) 先方の提供する供与の遵守を確認

今回のチームの活動拠点（カヤコア及びエル・プエルトはいずれもハリケーンによりインフラ被害の激しい場所であり、現場での安全確保、機材の盗難防止策等について先方より確認した。

(3) 団員の健康状態等

現在のところ、日程が過密であり、疲労が懸念される。団長と相談し、必要に応じて休息日等の日程を調整したい。

平成10年10月10日

ドミニカ共和国ハリケーン災害救済
緊急援助隊
上條 直樹

業務報告（10月10日分）について

標記に関し、下記の通り取り急ぎ報告します。

記

1. 業務内容

- (1) 8:00厚生省地方事務所前集合、資機材の積み込み
- (2) 8:40分現地カヤコアへ出発
- (3) 9:10現地活動現場（診療所）到着後、先方医師等と協議、レイアウト等確定
- (4) 11:30セッティングを概ね終了
- (5) 団内打ち合わせ後15:00から患者の受付・診療を開始
- (6) 17:00受付終了、先方医師等を含めて反省会、明日の予定等を決定、後片づけ
- (7) 19:00団員等のホテル帰着

2. 診察・治療の概要

- (1) 活動地概要： カヤコア村、人口約2000人、サトウキビ栽培等を主要産業。現時点でのハリケーン被災者人数は不明だが、家屋の倒壊等で住居のない約22家族150人が小学校に避難中。
- (2) 患者人数： 34人
- (3) 来訪患者数： 約150人
- (4) 診察・治療の結果
症状は、下痢、外傷、風邪、喘息、赤痢等広範にわたった（特定疾患に限定なし）
投薬の他、外傷等については応急措置を行った。

3. 今後の活動日程

- (1) 明日（10月12日（日））は終日カヤコア診療所にて活動。首都よりJICA事務所の契約した撮影隊2名が来訪予定。
- (2) 10月13日（月）は機材を次の目的地（エル・プエルトス診療所）へ搬送・設営する。また、19:00から隣県ラ・ロマーナ関係者と協議予定。

4. その他留意事項

- (1) 資機材の置かれている診療所周辺は洪水被災者の避難所もある（小学校）。資機材の夜間における管理は厚生省が責任もって行うことを確約済みであるが、当直医師や

地元警察のパトロールによる管理を重ねて依頼した。

- (2) 当方の来訪を聞きつけた結果、患者の数が予想以上に多く、当初のトリアージに戸惑った。この点については、現地医師に当初よりかかっていた者については原則現地医師（診療所医師：今回のカウンターパート的存在）に診てもらふこととし、それ以外を当方が担当する事となったが、明日以降選別作業の効率化のために、トリアージは現地事情に詳しい現地医師と当方（現場で協力・参加している矢田協力隊看護婦隊員）にまかせ、相手方で診れる患者をまず相手方中心に決定し、それ以外を当方が診る方式を徹底する事となった。先方医師に任せられるものはまかせ、薬剤等が問題で先方の手に負えない者については薬剤のみ供与し、技術的に先方で可能なものは先方を信頼するという方式である。
- (3) 現在、投薬については、逐一英語・日本語等の処方箋を西語に訳している。この方式を継続し、現地医師等への説明をさらに加えることで、当方の撤退後の使用について安全を確保することとする。

5. エピソード的事項

診療所は若いウーゴ医師を中心に運営されているが、今回の当方診療活動に当初戸惑いの表情を見せながらも、次第に団長の治療のそばに立ち、説明に熱心に耳を傾け始め、患者の救済に向かい尽力する姿が眼を引いた。現地スタッフとの連携による緊急医療活動のもつ「何らかの可能性」を感じさせられる。

以上

平成10年10月11日

ドミニカ共和国ハリケーン災害救済
緊急援助隊
上條 直樹

業務報告（10月11日分）について

標記に関し、下記の通り取り報告致します。

記

1. 業務内容

- (1) 8:15活動拠点カヤコア診療所へ到着
- (2) 8:30～12:00午前中の診療活動
- (3) 15:00～17:00午後の診療活動
- (4) 17:00～18:00現地側スタッフを含め反省会、機材の撤収
- (5) 19:00～20:00資機材の厚生省倉庫への搬入、翌日についての協議
- (6) 20:15団員等のホテル帰着

2. 診察・治療の概要

- (1) 活動地概要 : カヤコア村、人口約2000人、サトウキビ栽培等を主要産業。現時点でのハリケーン被災者人数は不明だが、家屋の倒壊等で住居のない約22家族150人が小学校に避難中。
- (2) 来訪患者人数 : 70人
- (3) 診療患者数 : 約250人
- (4) 診察・治療の結果
症状は、昨日同様下痢、外傷、風邪、喘息、赤痢等広範にわたった（特定疾患に限定なし）。しかしながら、ハリケーン災害直後から症状の発生した患者が多いことから、ハリケーンの間接的影響であることが明白であった。また、復旧工事中の外傷もあり、災害の時間的広がりをも語る。
- (5) JICA事務所より撮影隊による撮影あり、サン・ペドロ・デ・マコリス県担当厚生次官も診療所を訪問する一幕もあった。

3. 今後の活動日程

- (1) 明日（10月12日（月））は活動場所を、エル・プエルトスへ移す。
団員の疲労度等も勘案し、午前中を原則休息し、午後から機材の搬送、セッティングに当てる。夕刻7時から隣接県ラ・ロマーナの厚生省担当者らと現地被災事情、受け入れ体制の確認のための協議を実施する。
- (2) 10月13日（火）は終日エル・プエルトスで診察することとなるが、宿舎のあるマ

コリス市から約1時間の距離にあるため、午後の診療開始時間については通常より1時間早め、14:00～16:00とする。

4. その他留意事項

- (1) ラ・ロマーナ県にて活動中もサン・ペドロ・デ・マコリス県厚生省事務所にて資機材保管を行うべく先方へ要請し、了解を得た。
- (2) カヤコアでの活動終了にあたり、現地医師による今後の継続治療上必要で、かつ、使用が可能と判断される携行医薬品については逐一説明（用法等）の上、供与を行った。

5. エピソード的事項

- (1) 被災直後は、当診療所も避難地として約200人が押し寄せたという。6日後からは徐々に帰っていったが、どうやってこの狭い建物（診療室2、待合室1、処置室1その他の小さな建物）に200人が住んでいたのか不思議なほどである。現地准看護婦の1人も我々の控え室で「生活」しており、聞くと被災したそうである。
- (2) 被災地を写真撮影中男に急に呼び止められ、目的を強い口調で問いただされ、周囲の男たちの注目を浴びた。当方の訪問、撮影目的を告げると、途端に表情が柔らんだが、正直「まずい」と思った。
- (3) 活動地点のあるカヤカオ地区では約500人が家屋を失い、避難したが、現在でも約25家族150人がカヤカオ小学校に避難している。被災地状況の一貫として現場を訪れた際には、まず異臭が鼻をついた。半裸の子供がおどりでてくる傍らで、母親たちが口々に「なにかくれないかとせがみ、我々を囲み込む。また、医療チームであることを告げると、薬品を求めるか食品を求め。1教室を2～3家族が使用しているが、水、電気がなく悲惨である。畑を持たない男性は被災で職もなく、家もない。近くで若い男が怒鳴っているのが、避難民のいらだちの程度を物語る。
- (4) 早朝8時に3歳の子供（女兒）がアルコール40ccを誤飲して、診療所にかつぎ込まれた。現地診療所には点滴もなく処置に窮していたが、当方持参の点滴を使用し、現地到着とほぼ同時に点滴を開始した。

点滴を継続し、午後から現地医師の判断により子供を中央の病院（マコリスの総合病院）へ移送する事となったが、車両がなく協力を求めた。援助隊の車両により、迅速に移送が可能となった。洪水災害とは直接の関係を有さないが、この子にとっては生死を分かち一場面となった。

以上

平成10年10月12日

ドミニカ共和国ハリケーン災害救済
緊急援助隊
上條 直樹

業務報告（10月12日分）について

標記に関し、下記の通り取り報告致します。

記

1. 業務内容

- (1) 午前中は原則自由行動（近隣被災地視察、データ整理等）
- (2) 13:30厚生省サン・ペドロ・デ・マコリス事務所にて機材積み込み開始
- (3) 14:00同事務所出発
- (4) 15:30エル・プエルトス診療所到着、現地医師らと打ち合わせ
- (5) 17:15診療所出発
- (6) 18:45ホテル帰着、厚生省ラ・ロマーナ事務所担当者（ラ・ロマーナ担当次官兼局長（医師）、ペルドモ計画調整官（医師））と協議
- (7) 21:30協議終了、団内打ち合わせの後隊員解散

2. 診察・治療等の概要

- (1) 午前中は、鈴木、永野、矢田多員は近隣被災地（コンスエロ等）を視察・巡回医療。団長他3名は、団内打ち合わせ、資料解析等を手分けして実施。
- (2) 午後は、設営と現地スタッフとの事前打ち合せ。診察室を「ド」側と当方の2室に分け、基本的には「ド」側も通常の診察を継続できるようにした。
- (3) 当方宿舎のあるマコリスからエル・プエルトスまでは片道約1時間20分の行程であり、沿線には壊滅状態となった生々しいピナルの林や大木の根こそぎされた後、屋根の吹き飛んだ家々、45度程度傾いた家屋、瓦礫の前にたたずむ少女などが観察された。
- (4) ラ・ロマーナのC/Pとの協議結果概要下記の通り。
 - ・ 先方の要請、被災地の人口、被災の規模、現状、受入体制等を勘案し、ラ・ロマーナにおいては2カ所、すなわち1) カレタ 2) クマヤサとする（なお、ラ・ロマーナ全体が停電）。
 - ・ 診察場所は、カレタにおいては小学校、クマヤサにおいては集会所とする。
 - ・ 先方便宜供与： 機材の搬入、撤収（保管はマコリスに継続）、机、椅子、診察台等の入手。
 - ・ 診察活動中医師1名看護婦3名を各活動地にて配置（これらは、活動対象2地区の管轄医師らとする）
 - ・ 我が方にて処置仕切れないほどに重症な者については先方が責任もってリフェレ

ンシャル病院（ラ・ロマーナ病院）へ移送するか、医師等を派遣するなどの処置を行う。また、我が方が不在ないしは撤収後も継続して治療が必要な患者についても先方が責任を持つ。

3. 今後の活動日程

- (1) 明日（10月13日（火））はエル・プエルトで8:30から診療を開始予定。よって出発は6:30とする。宿舎まで遠距離にあるため、食事は現地で携行したものをとることとし、午後の開始をこれまでの15時から14時に早める代わりに受付締め切り時間も1時間早め16時とする。その後撤退作業を開始し17時には帰路につくこととする。

4. その他留意事項

- (1) 帰国に当たっての機材のサント・ドミンゴへの搬入先については、別途JICA事務所と相談する。
- (2) 本日は国際電話が復旧工事中で使用できない。インマルサットに頼るしかない。

5. エピソード的事項

- (1) エル・プエルトへの道すがら、かなり悲惨さを感じたが、それとは裏腹に子供たちは好奇心に満ちあふれている。JDRの垂れ幕を張ると口々に「ハパン」（JAPANの西語読み）と読み上げる。子供が明るいのがせめてもの救いだ。
- (2) 宿泊先のホテルは平常時には海水浴などの観光客が多いそうだが、現在ではプールで泳ぐ人すらいない。付近一帯は美しいカリブ海に面し風光明媚だが、同じ自然が意図も簡単に魔の手をさしのべる。ホテルの海側は、1室を除き全室（20室程度）がハリケーンの暴風で窓ガラスを割られてしまっている。また、ホテルの椰子並木も、まるで朽ちかけた電信柱のようだ。町では夜10時から翌朝6時まで外出禁止令がでており、遠くでかすかに聞こえるメレンゲもむなしく響く。
- (3) マコリスの国立テオドラ・ジョージ病院には、ニューヨーク市から緊急援助の医師・技師チームが派遣されている。当方のベスト姿を見かけるとすぐに近寄り「なにかあったらすぐ相談に来てくれ」と既に何人にも声をかけられた。時間があればゆっくり情報交換（できれば視察も）したいが、残念だ（ちなみに、今回の我が方活動地内には、他機関の援助活動（UNICEFの浄水器等機材援助を除き）はなし）。

以上

平成10年10月13日

ドミニカ共和国ハリケーン災害救済
緊急援助隊
上條 直樹

業務報告（10月13日分）について

標記に関し、下記の通り取り報告致します。

記

1. 業務内容

- (1) 6:30 宿舎出発
- (2) 7:00 マコリス厚生省事務所にて資機材積み込みの後、出発
- (3) 8:15 エル・プエルト診療所到着
- (4) 8:30 午前の診療開始
- (5) 12:00 午前中受付終了
- (6) 14:00 午後の診療開始
- (7) 17:30 資機材の撤収の後出発
- (8) 19:00 ホテル帰着
- (9) 22:00 協議終了、団内打ち合わせの後隊員解散

2. 診察・治療等の概要

- (1) 来訪患者数： 約300人
- (2) 診察人数： 約100人、病名等については様々。
- (3) 特筆事項： 頭部縫合手術の実施、胃潰瘍患者の点滴処理とロス・ジャノス病院への緊急移送の実施等。
- (4) その他（現地医師との協調・分担関係）

診療所には現地医師2名がいるので、基本的には現地医師の診療は通常通り行った（患者数は、我が方の活動の影響で格段に多かったが）。トリアージュにて現地医師の1人（研修医）が患者の選別を行い、過去から現地医師に診てもらっている患者等は現地医師に回し、その他を当方医師に回す方式をとった。また、現地医師による治療が適当であっても薬剤のない場合であって、当方に薬剤が存在するときは、現地医師の処方でも当方の薬剤を提供することとした。

3. 今後の活動日程

- (1) 明日（10月14日（水））は、巡回医療チーム、カルテ等解析チーム及び物資調達・事務所報告チームの3つに分かれて行動する。

4. その他留意事項

(1) 本日の活動終了後、資機材の収容先はマコリス厚生省事務所となっていたが、倉庫の鍵を持ったメンドーサ所長が不在となり、玄関で長らく待たされるという一幕があった。倉庫の使用については当方の資機材の保管が中心であるため、「メ」所長の許可を得た上で15日以降に供え予備の鍵をチーム側で持つこととしたい。

5. エピソード的事項

(1) 到着直後から黒山の人だかりとなった。治安の維持のため診療所敷地内に入りきれない人たちは、鉄柵の外で待つこととなったが、順番を競うのと、開門を求める人たちが門番と押し問答になるのとで殺伐とした光景が展開した。幸い地元の警察官も応援してくれたので平穏は一応保たれた。しかし、ひとたび外に出ると何とか受付してほしい人たちに取り囲まれてしまう。中には、この日のために朝6時半に赤ちゃんを抱えて村を出てきた母親の姿もあった。彼女は10時に診療所に到着したがなんと3時間半かけて来たことになる。幸いトリアージュに間にあったのが不幸中の幸いだった。12時には受付を終了し一旦患者を外に出す予定であったが、炎天下病気の赤ちゃんを連れた母子を外に出すわけにも行かないので、中で待たせた。

(2) 診察室付近もさながら野戦病院という雰囲気となった。どこからともなく順番を無視した患者が入り込み、自分や家族の病状を訴えて来る。何とかスペイン語で先生に伝えてほしいと何十人にも嘆願される。また、子供のためになにか食料を恵んでほしいといった類の人も多かった（老人が3つ子の孫のために食料を恵めとって暴れ回る一幕もあり、杖のようなものを至近で振り回されたときは本当に緊張した）。

(3) 午前中に頭を父親に殴られた少女が連れてこられた。頭部の縫合が必要と判断され縫合手術が行われた。現地の看護婦リリが日本でも父親がこんなことをするのかと尋ねてきたので、恥ずかしかったが、「Si」と答えた。

(4) 場所がら食堂もないので、昼食は処置室にてとることとなった。先ほど少女の頭の縫合手術を行った部屋だ。食料は持参したカップラーメンや缶詰そしてお茶。とにかく蒸し暑い。

以上

平成 10 年 10 月 14 日

ドミニカ共和国ハリケーン災害救済
緊急援助隊
上條 直樹

業務報告（10月14日分）について

標記に関し、下記の通り取り報告致します。

記

1. 業務内容

(1) 分隊に分かれて行動

団長、白柿、玉井隊員についてはカルテ等診断結果の解析作業を、鈴木、矢田、永井隊員についてはサン・ペドロ・デ・マコリス周辺の被災地（エスペランサ等）にて巡回医療、小職については、サント・ドミンゴにて、物品（薬瓶等）調達及びJICA事務所報告を行った。

(2) また、午後4時から団長及び小職にてニューヨーク市の災害復旧チームから情報入した。概要2. 記載の通り。

2. 診察・治療等の概要

(1) ニューヨーク市救援チームからの情報入手結果概要以下の通り。

- ・派遣機関 : ニューヨーク市
- ・派遣期間 : ハリケーン災害直後～12月1日を目処
- ・派遣目的 : サン・ペドロ・デ・マコリス市にある国立総合病院（テオドア・ジョージ病院（100省程度、3階建ての総合病院、ハリケーン災害で屋根と3階部分に被害、小児・分娩・未熟児室等があったが使用不可能となった。）の機能復旧。
- ・活動の内容 : 病院3階部分の復旧のための技術指導（資機材等は「ド」側負担）。
- ・チーム編成 :

構造（建築）技師	4名
医師	1名
電気技師	1名
消防士	1名
警察官	1名
病院技師	1名
機械技師	2名（ガソリン及びディーゼル）
調整員	1名
合計	11名（但し10/14現在）
- ・特筆事項 : (1) チームの編成は活動の内容の変化に応じて変わる。また、活動期

間も、一応12月1日を目処としているが、「ド」側の資機材調達の能力の問題もあり、柔軟に考えている。

(2) ローカル・スタッフ等の備上はなく、ドミニカ警察が車両の提供等を行っている。

(3) ニューヨーク市には約10万人のドミニカ移民がおり、今回の災害に対する応援要請に応えた由。

3. 今後の活動日程

(1) 明日(10月15日(木))はラ・ロマーナ県のカレタにて活動のため午前7時25分宿舎出発とする。午前中設営を行い、午後2時から診療を開始予定。

(2) 午前8時過ぎに地元の取材予定。また、午後2時には赤沢大使が現地視察、プレス取材が行われる予定。

4. その他留意事項

(1) 国際電話の復旧工事が終了していない。

(2) 帰国に際し、携行機材を除く資機材すべてサン・ペドロ・デ・マコリス厚生省事務所に保管しておき、後日、JICA事務所に引き取りに来てもらうこととする。

(3) 先方に供与してゆく資機材についても、厚生本省に倉庫が不足しているため、ひとまずマコリス事務所においておくこととしたい(リストは作成、厚生大臣宛に報告する)。

以上

平成 10 年 10 月 15 日

ドミニカ共和国ハリケーン災害救済
緊急援助隊
上條 直樹

業務報告（10月15日分）について

標記に関し、下記の通り取り報告致します。

記

1. 業務内容

- (1) 7:25 宿舎出発
- (2) 8:10 マコリス厚生省事務所にてメンドーサ所長と打ち合わせ
資機材積み込みの後、出発（途中スーパーで水等物資調達）
- (3) 9:05 カレタ到着
- (4) 9:25 診療場所の選定、設営
- (5) 10:30 先方医師等と全体会議
- (6) 11:10 一旦宿舎へ引き上げ、昼食
- (7) 13:00 宿舎出発
- (8) 13:30 カレタ診療場所到着、診療準備
- (9) 14:00 診療開始
- (10) 16:10 診療受付終了
- (11) 16:40 診療終了
- (12) 17:15 後かたづけの後帰路
- (13) 18:05 宿舎着

2. 診察・治療等の概要

(1) 診療地区（カレタ）の概要

- ・人口 : 約6,000人
 - ・家屋数 : 約3,200戸
 - ・住民構成: 工業労働者、漁民、農民その他様々（但し、サトウキビ労働者は少ない）
 - ・ハリケーンによる被害:
死者0人、家屋喪失約100戸、避難民26戸（10/15現在）
 - ・主たる避難先: 親戚等の家、空家（建築中集合住宅等）、拘置所
- (2) 来訪患者数: 約200人
 - (3) 診察人数 : 約60人、病名等については(4)の通り様々。
 - (4) 特筆事項 : 丹毒、とびひなど衛生状態の劣悪な地域に特殊な感染症例がみられ

た。その他、結核、糖尿病によるエソ、狭心症、虫歯等様々。特に、丹毒や疫痢（腸炎脱水の状態）がみられたが、現在の日本では珍しいという。

(5) その他（現地医師との協調・分担関係）

診療所となったのは民家（当初予定していた小学校は、屋根が破損しており、診療施設としては不適切であった）であり、カレタにはこれまでの2カ所と違い医療機関が存在しない。診療は、我が方のみで実施する事となった。他方、先般のラ・ロマーナ厚生省事務所との協議結果のとおり、我が方活動のフォローを行ってもらうため、後方病院であるラ・ロマーナ病院（フランシスコ・ゴンザロ病院）の医師、厚生省事務所の医師等が診療中待機する体制をとった。但し、トリアージュには現地医師と現地看護婦、当方矢田を配置した。診療そのものは、我が方医師1名のみだが、先方の協力者数は厚生省医師・看護婦以外にも小学校長、普及員等を含め非常に多いものとなった。

3. 今後の活動日程

- (1) 明日（10月16日（金））は、終日カレタにて診療活動を実施予定。
- (2) 10月17日（土）夕刻には、先方関係者を招いて結果総括兼打ち上げを行う予定。

4. その他留意事項

- (1) 本日早朝のマコリス厚生省事務所との協議結果、メンドーサ所長は倉庫の鍵の1つを快く渡してくれた。また、チーム撤退後もJICA事務所が引き取るまでの期間、倉庫を貸してくれる旨約束してくれた。
- (2) 本日、午後赤沢大使一行が、現場を視察された。現場には、レージェス厚生省ラ・ロマーナ担当次官兼地方事務所長他ファン・ホセ・サンタ・アナ、ラ・ロマーナ県知事も訪れ、診療所前で知事から大使に感謝の意が表明された。

5. エピソード的事項

- (1) 当初活動予定としていた小学校の屋根が破損しており、使用不可能と判断されたため、現場到着後すぐに物件探しとなった。先方に2軒ほど案内された場所は、いずれも建築中の建物だが、避難民が住んでおり、衛生状態、物品管理、患者の動線等の観点から不相当と判断されたため、結局空き部屋を有する民家に落ちつくこととなった。
- (2) 箕輪団長の説明によるとここ数日、精神的に参っている患者が散見されるようになったという。第一番目診療場所であるカヤコアではみられなかった現象である。このような患者はいずれもハリケーン災害で家屋を喪失した者であるため、いよいよ災害による強いストレスが人々の精神面に影響を与え始めているらしい。

6. 本部への質問事項等

下記につき、アドヴァイスください。

- (1) 後送機材はDHL航空便を考えているところ、これまでの事務局経験上今回の携行機材中通関等で問題となりうるものの存否（なお、使用済み薬剤・治療器具等は当地にて適宜処分しますので、それ以外でなにかあるかどうか）。
- (2) また、DHLでなく郵便の場合どうか。
- (3) 残留医薬品、医療器具（点滴セット等）については、一括して厚生省（本省）供与予定ですが、現在考えているのは、帰国前の厚生大臣宛報告書に物品のリストをアタッチし、「別添の通り機材を供与する」旨記載、団長・先方代表でサインする形式（PNGの例を雛形とする）です。
- (4) 帰国報告会は全員集まって行うのかどうか。その場合いつ頃になるか（通常1カ月程度？）。会という形でなく報告書では済ませられないかどうか。

以上

平成10年10月16日

ドミニカ共和国ハリケーン災害救済
緊急援助隊
上條 直樹

業務報告（10月16日分）について

標記に関し、下記の通り取り報告致します。

記

1. 業務内容

- (1) 7:25 宿舎出発
- (2) 8:05 カレタ到着
- (3) 8:30 診療受付開始
- (4) 11:30 受付終了
- (5) 11:50 一旦宿舎へ引き上げ、昼食
- (6) 14:00 宿舎出発
- (7) 14:30 カレタ診療場所到着、診療準備
- (8) 15:00 診療開始
- (9) 17:00 診療受付終了
- (10) 17:40 診療終了、重要事項の現地医師への引継、撤収準備
- (11) 18:00 撤収（途中、明日の診療地クマヤサの設営場所視察）
- (12) 19:15 宿舎着

2. 診察・治療等の概要

- (1) 来訪患者数： 約150人（昨日中に時間の制約で全員を診れない旨連絡済み）
- (2) 診察人数： 約130人、病名等については(3)の通り様々。
- (3) 主な傷病： 結核、化膿性関節炎、湿疹、下痢症等（詳細は別途）。患者の種類としては、中高年か母子（特に子ずれの母親の姿が目立った）。
- (4) その他： 少年の股関節に相当量の水がたまっていたが、抽出処置が行われた。抽出液については、ラ・ロマーナ病院にて検査をすることとなった。また、結核患者についてもラ・ロマーナ病院で継続診療することとなった（カレタでは原則当方医師のみによる診療だが、当地での後方病院であるラ・ロマーナ病院医師・看護婦が当地での全行程に順番で待機、診療結果の引継等を受ける体制をとった。なお、トリアージュには現地医師、看護婦及び当方隊員が当たることは前回報告の通り）。

3. 今後の活動日程

- (1) 明日(10月17日(土))は、午前8時30分にマコリスを出発、9時にはクマヤサに機材を搬入。厚生省ラ・ロマーナ事務所にて表敬訪問兼打ち合わせの後、再度クマヤサへ移動し、診療場所の設営を継続するとともに周辺調査を行う。
- (2) 午後2時から4時まで診療の受付を行う予定。重要事項の現地医師への引継の後、資機材をサン・ペドロ・デ・マコリス厚生省事務所へ移送し保管する。
- (3) 明後日(10月18日(日))は、午前中資機材の使用量等チェック、梱包作業の後、12:30には宿舎撤退予定。

4. その他留意事項

- (1) 厚生省サン・ペドロ・デ・マコリス事務所に撤収後も一時資機材を保管することになるが、撤収後速やかに後送手続きをとるべく、チームの「ド」国出発後すぐ(10/19(月))には、JICA事務所による引き取りを行うこととなった。

5. エピソード的事項

- (1) 午後から少年の膝関節にたまった水約50ccを抽出する処置が行われた。淋菌による可能性関節炎ではないかということだが、処置後うっかり抽出済みの液を踏んでしまった。小職は靴を脱いでベッドの上からビデオ撮影した直後であったので、靴下の踵あたりがねっとり塗れて焦った。すぐに白柿団員に消毒してもらったが怪我でもしてない限り大丈夫だそうなので安心した。
- (2) 昼食時には、診療基地残留組と宿舎組とに分かれたが、診療地では、地元の婦人らから現地料理の差し入れも行われた。C/P看護婦らの説明によると、カレタという地区は、「Muy Dominicana」だという。その意味するところは、共同体の互助精神まだまだ残っているというようなことらしい。確かに、サトウキビの刈り取り・運搬等の労働者が中心で、ハイチからの移民もいるといわれるカヤコア(第一番目の診療地)とこのカレタとでは村の雰囲気異なる。昨日・本日で学校関係者、普及員などが炎天下の中ボランティアで患者の誘導や、整理に当たってくれたり、村としての結束をうかがわせる。

以上

平成10年10月17日

ドミニカ共和国ハリケーン災害救済
緊急援助隊
上條 直樹

業務報告（10月17日分）について

標記に関し、下記の通り取り報告致します。

記

1. 業務内容

- (1) 8:00 宿舎出発
- (2) 8:10 マコリス厚生省事務所にて、ラ・ロマーナ厚生省事務所C/Pらと合流、資機材積み込みの後、出発（途中スーパー、スタンドで水ガソリン調達）
- (3) 9:05 クマヤサ避難所（集会所）到着、設営開始
- (4) 9:50 ラ・ロマーナ病院視察、クマヤサ村内被災状況等視察
- (5) 11:20 現地に残留し会場準備、被災現場視察（団長、永野、小職のみ一旦宿舎へ帰還、所用を行う）
- (6) 13:00 宿舎出発
- (7) 13:45 クマヤサ避難所到着、診療準備
- (8) 14:00 診療開始
- (9) 16:10 診療受付終了
- (10) 16:40 診療終了
- (11) 18:15 現地撤退
- (12) 18:50 宿舎着マコリス厚生省事務所に資機材を保管
- (13) 19:00 宿舎帰着
- (14) 19:30 マコリス、ラ・ロマーナC/Pへの報告兼夕食会

2. 診察・治療等の概要

(1) 診療地区（クマヤサ）の概要

- ・人口 : 約3,000人
- ・家屋数 : 約300戸
- ・住民構成 : 農業等（但し、現在ではサトウキビ労働者はいない）
- ・ハリケーンによる被害：
死者0人、家屋喪失（居住不可能を含む）約270戸（被災直後）、避難民178人30数家族（被災直後、10/15現在には約3家族が避難）
- ・主たる避難先： 親戚等の家、診療所、小学校、拘置所
- ・村のインフラ： 電線は本来敷設されているが、ハリケーン被災し未復旧、水につ

いては、井戸が復旧している（但し診療には適さない）

- (2) 来訪患者数： 約100人
- (3) 診察人数： 約60人、病名等については(4)の通り様々。
- (4) 特筆事項： 子供2名の外傷縫合手術が行われた。被災の瓦礫（ガラスやトタン板）で切ったものである。
- (5) その他（現地医師との協調・分担関係等）
 - ・ 診療所となったのは村民の避難所（集会所）。がらんとした倉庫という感じである。奥には1家族の避難民が生活していたが、多くなかったため、ここを使用することに最終決定。先方の連絡が徹底していなかった（電話通信がきわめて困難な当地では仕方がないが）こともあり、集落のある地区の小学校（屋根を被災し、トタン屋根葺き工事中）を使用する予定だったという。場所的にはよかったが、設営の時間等や情報の錯綜の回避を図るため、避難所を使用する方針は変更しなかった（なお、現地には診療所が存在するが、きわめて小さいため、当初から活動場所の候補には挙げなかった）。
 - ・ 現地診療所の医師2名が今回の活動中、我が方活動の傍らで常時待機（原則1名は診察室で当方医師の診療を観察、患者の患者の引継等を必要に応じて受けた）。
 - ・ 今回診察活動場所が最終となるため、現地側で有効かつ安全に使用できそうな資機材や当方撤収後の継続使用が必要となる薬剤等については用法等説明の上供与した。

3. 今後の活動日程

- (1) 明日（10月18日（日））は、午前中に各団員それぞれの残務（先方提出用報告書等の作成、資機材の使用量等チェック、梱包等）を終了し、12時30分には、宿舎をチェックアウトし、サント・ドミンゴに向かう予定。

4. その他留意事項

- (1) 手荷物携行の機材以外については、後送となるため、一旦マコリスの厚生省事務所の倉庫に保管し、鍵を預かった。また、残留資材のうち現地にて使用可能なもの（点滴セット、一部薬品）については、厚生省宛引き渡すことになるが、これについても、マコリス事務所に一旦保管することとなった（配布計画については、緊急医療物資（UNICEF倉庫分）の配分計画と含めて、厚生省に策定してもらう）。
- (2) 後送資機材については月曜（10/19）に事務所が引き取ることとなった。

5. エピソード的事項

- (1) 被災の状況については、調査が難しい。すなわち、今回のクマヤサの場合も、本来の村落の周辺（村の少しはずれ）に低所得者の居住地が存在する。これらの家屋はそもそも簡素なものなので、被害も甚大であったと思われるが、その統計は存在しない。数字に表れない被害が相当程度存在すると推定される。

- (2) 被災後の復旧の程度も、なにをもって復旧というのか判定が難しい。たとえば、今回の被災地（本日のクマヤサを含めて4カ所）では、修復済みとされる家屋はいずれも本邦で言うところの小型～中型物置程度の規模が中心で、構造も拾った角材に端切れ板、中古トタン屋根といった至って簡素なもの（中にはほったてごやみみたいなものもある）であるために、本当に復旧とカウントしてよいのか疑問である。
- (3) 今回、2名の縫合手術が行われたが、いずれも、瓦礫による外傷患者である。この手の外傷は、瓦礫の処分が適切になされない以上継続すると思われる。当分の間こうした患者は後を絶たないことだろう。
- (4) 記録用のビデオ撮影は、困難をきわめた。少年の手のひらにできたガラスの切り傷は、昨日のもので、なんと傷口に「灰」をたっぷりこすりつけたという。洗浄、消毒、麻酔、縫合と手際よく診療が行われたが、少年が痛い痛いと言き叫んで暴れだしたため大変だった（母親、C/P看護婦さん、鈴木・白柿の4人がかりで固定した）。傷口からは次々と血がわき出る感じで、思わずカメラを回したが、通訳、アシスタントが足りないので、撮影は永野隊員にお願いした。電気がないので携行のハンドライトで先生の手元を照らす役をしていたが、後で手をみると赤い液がついていたので急いで洗浄した。
- (5) 玉井隊員に頼まれていたトキシイドをホテルに置き忘れた（ちなみに玉井隊員曰く、ホテルも快く薬剤の保冷に協力してくれたそうである）。急遽ホテルへと車を走らせた。いつものレストランのいつもの給仕が奥から薬箱持ってきた。途中マコリス市内の道路がスクールで水浸しとなり徐行せざるをえず、一刻も早く患者に届くよう祈りしかなかったが、何とか間にあってよかった。

以上



出発時在京ドミニカ共和国大使



カヤコア



現地C/Pによる受付（カヤコア）



カヤコア診療風景



カヤコアでの薬剤管理



カヤコア



ラ・カレタ仮設診療所



ラ・エリーサ視察



被災した家屋



海岸沿いハイウェイの被災風景（復旧工事中）



ラ・カレタでの永野協力隊員と協力した医療活動



ラ・カレタにて大使及び現地関係者が視察



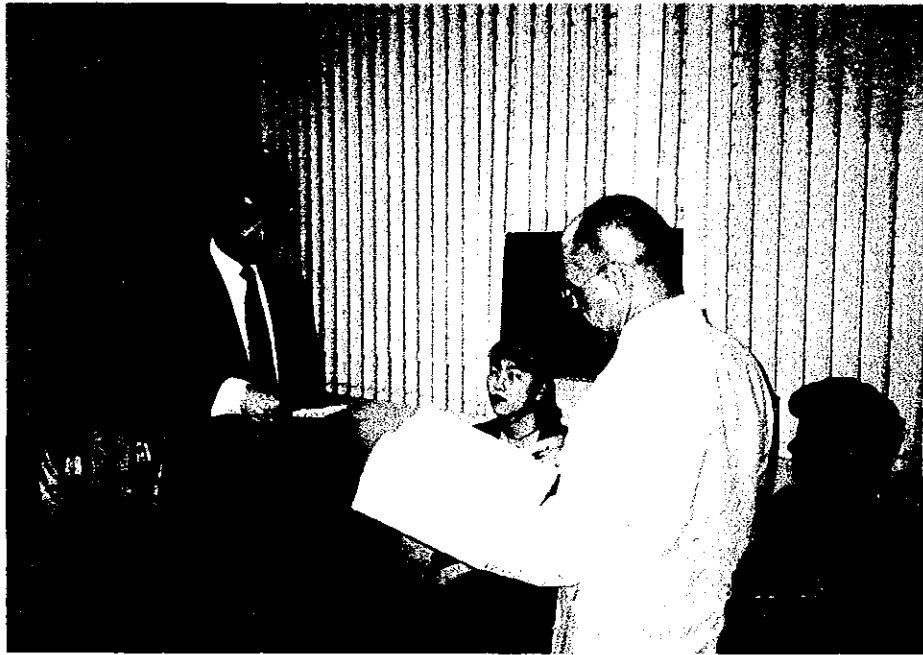
クマヤサ (学校での診療活動)



ラ・ロマーナの後方支援病院



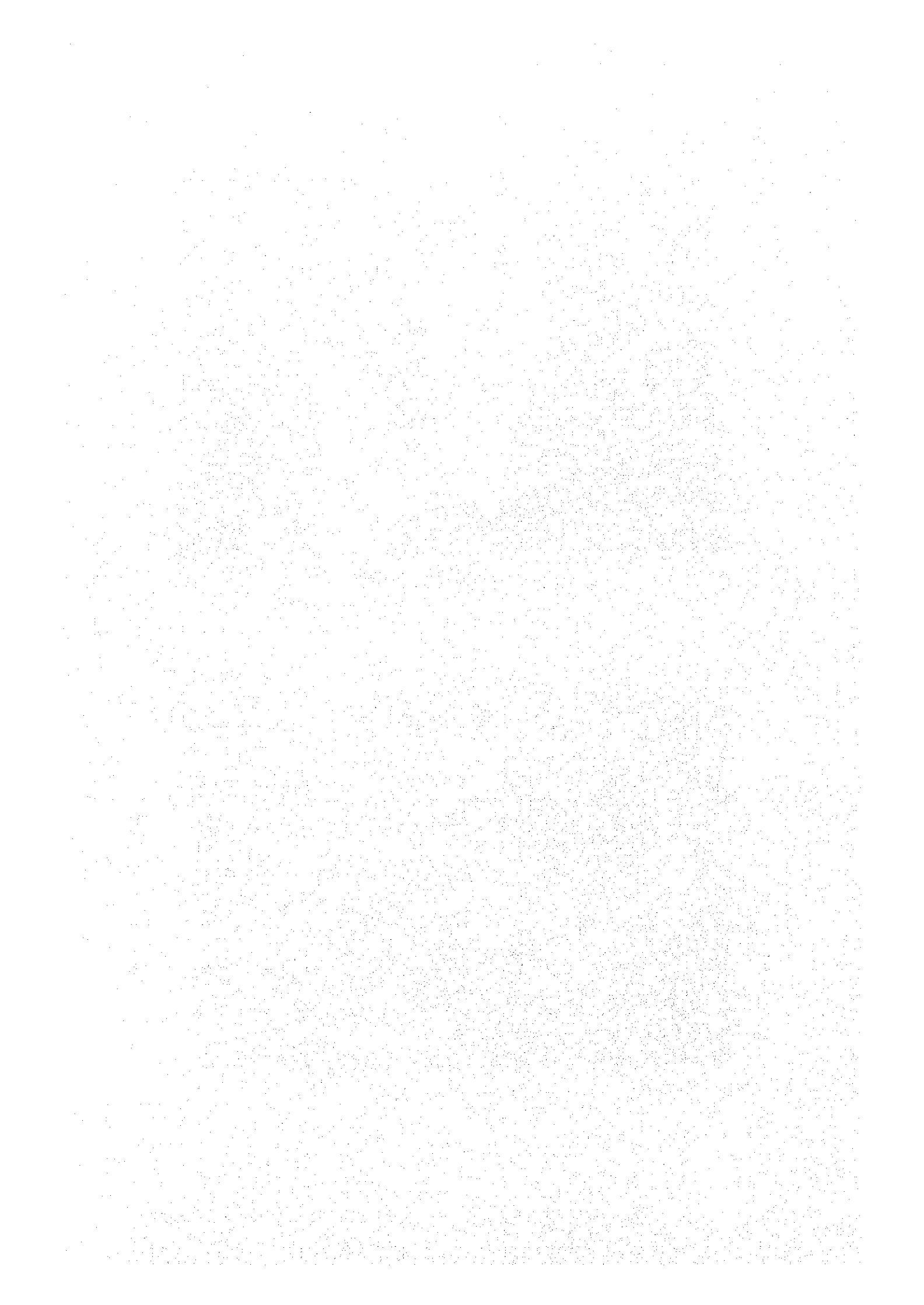
ラ・ロマーナの後方病院視察 (ここでは診療は行わず)

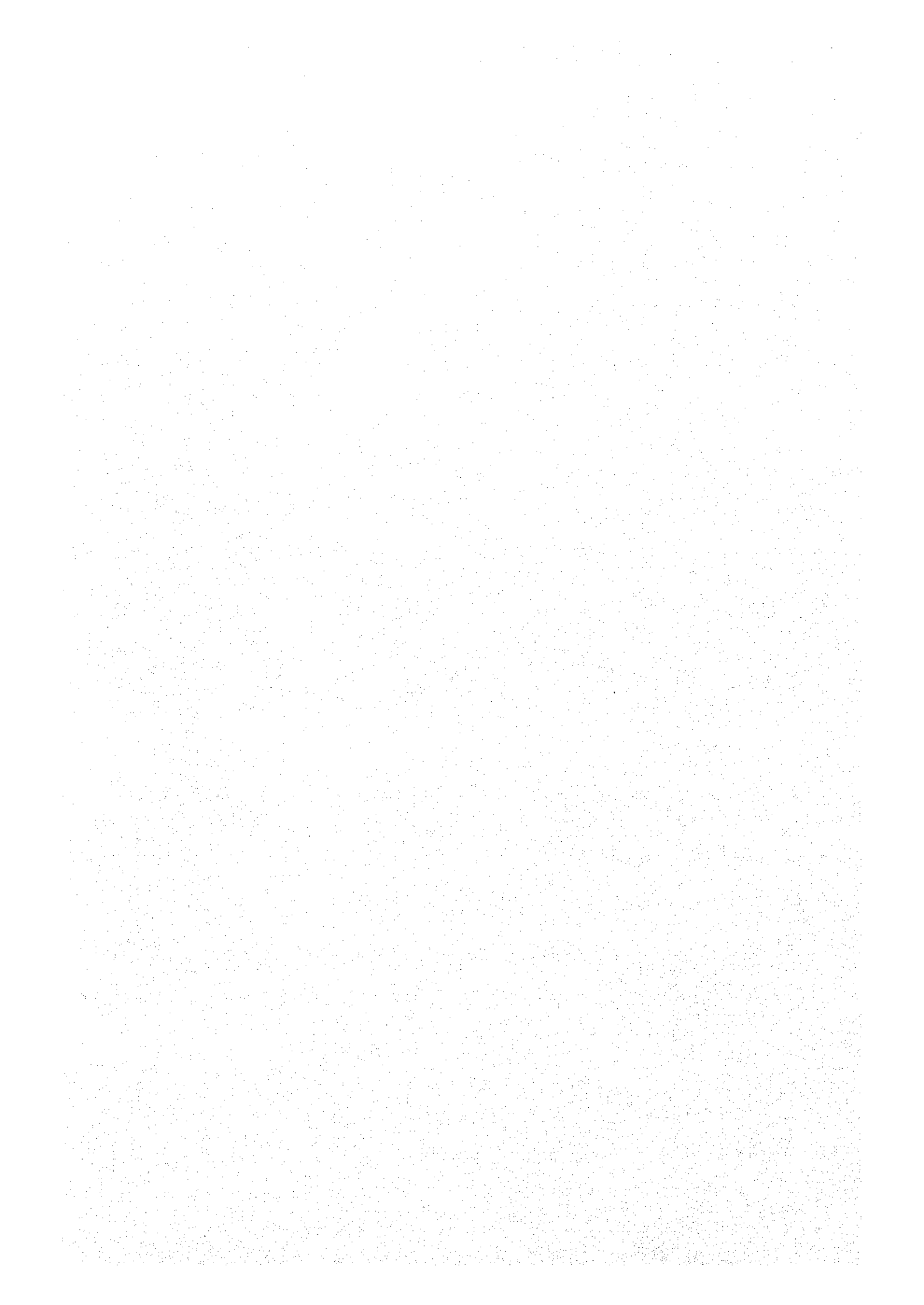


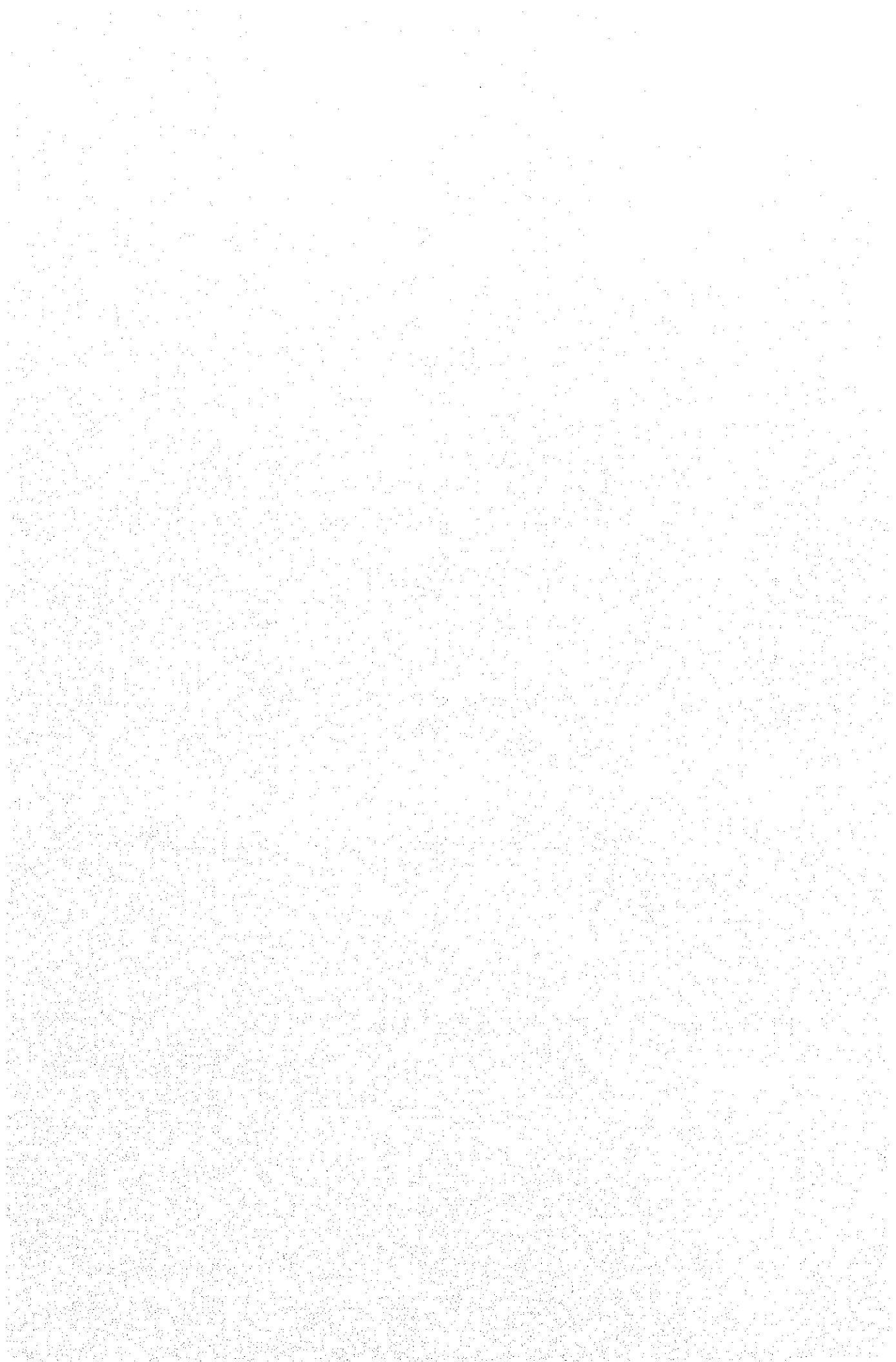
ドミニカ共和国厚生省での報告



厚生省での報告・取材







JICA

LIB